

1 作物

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 早期・短期 水稲の管理</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○早期・短期水稲の管理 ○普通期水稲の管理 ○大豆の管理 <p>7月14日高松地方台気象台発表の1か月予報では、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ない見込みである。</p> <p>ア 水管理 早期・短期のコシヒカリ、あきたこまちは登熟期を迎える。 この時期は間断かん水が基本であるが、田面を乾かしすぎると品質が低下するため、湿潤気味の管理(飽水管理)に努める。再入水の目安は、田面の足跡に水が残っている状態である(写真1)。</p>  <p>適度な土壤水分を保つことで、根の健全化を図る。 落水が早すぎると、葉での光合成能力が低下し、籾の充実が不十分となり、くず米が多くなる。落水時期は、収穫の5～7日前を目安とする。</p> <p>イ 収穫適期 本年の早期水稲の出穂時期は平年並である。向こう1か月の平均気温は高い見込みであり、成熟期は平年並～やや早いと予想される(平年の成熟期: 4月20日移植 あきたこまち8月9日頃、コシヒカリ8月16日頃)。 収穫始めは、早期コシヒカリは最長稈黄変籾率75%、籾水分25～30%、短期あきたこまちは最長稈黄変籾率85%、籾水分25%の頃である(出穂期後の積算温度850～1,050℃程度、出穂後日数33～38日頃)。ほ場観察のうえ、適期収穫に努める。</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(2) 普通期水 稲の管理</p> <p>(3) 大豆の管 理</p>	<p>ウ 乾燥・調製</p> <p>この時期は温度・湿度が高く、品質が低下しやすいため、乾燥・調製にあたり以下に留意する。</p> <p>生粳の長時間堆積(4時間以上)は品質低下を招くため、収穫後はすみやかに乾燥する。乾燥温度は40℃以下とし、毎時乾燥速度(乾減率)は平均0.8%以下とする。過乾燥を防ぎ、仕上がり水分14.5~15%を目標にする。</p> <p>なお、高水分粳(25%以上)の場合は水分ムラが多いので、張込み後はできるだけ早く送風を始める。5~6時間以上経ってから通常より5℃低い温度で乾燥し、水分20%以下になってから普段通りの熱風温度で乾燥する。</p> <p>粳摺前に機械を事前点検し、肌ズレ等の品質低下に注意する。</p> <p>普通期水稲は、幼穂形成期から出穂期を迎える。穂肥は、ひめの凜、にこまるで出穂20日前(幼穂長2mm)を目安に施用する。ヒノヒカリは未熟粒が発生しやすいので、弱勢穎花の着生を抑制するために、出穂18日前(幼穂長8mm)とする。幼穂長の見方については「今月の農作業7月」を参照する。施用量は10aあたりチッ素4kg、カリ4kgを基準とし、葉色により調整する。</p> <p>この時期は、水稲が最も水を必要とする時期であるため湛水管理とし、田面を乾燥させないように注意する。斑点米カメムシ類は畦畔での発生密度が高いため、ほ場周辺の雑草を出穂15日前までに除去する。</p> <p>ア かん水</p> <p>7月上・中旬は種のフクユタカで8月中・下旬頃に開花期となる。大豆は水分要求量が多く、特に開花期以降は多量の水を必要とする。この時期の乾燥は花ぶるいや着莢不良による減収、青立ちによる収穫遅延を招く。そのため7~10日以上降雨がなく、最先端葉が立ち上がり反転して白く見えるような場合(写真2)は、うね間かん水を行う。なお、高温時のかん水は根傷みを起こすので、朝夕に実施し、かん水後はすみやかに落水する。</p>

項 目	作 業 内 容
	<div data-bbox="513 360 1331 696" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="536 707 1294 741">写真2 うね間かん水の目安（左：ほ場全体、右：葉の反転）</p> <p data-bbox="472 813 699 846">イ 病虫害防除</p> <p data-bbox="472 860 727 893">○ハスモンヨトウ</p> <p data-bbox="486 907 1358 1133">8月中旬以降に被害が拡大する。白化葉（ふ化直後幼虫が群がって加害している被害葉）の早期発見と除去に努め、若齢幼虫期の防除を基本とする。薬剤感受性の低下を防止するため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。</p> <p data-bbox="472 1146 667 1180">○カメムシ類</p> <p data-bbox="486 1193 1378 1328">吸汁加害によって着莢が阻害され、減収や青立ちによる品質低下の要因となる。ほ場周辺の除草に努めるとともに、開花終期から子実肥大期にかけて2回程度防除する。</p> <p data-bbox="472 1341 600 1375">○紫斑病</p> <p data-bbox="486 1388 1358 1659">種子が侵されると紫斑が現れて品質が低下する。中山間地帯で発病しやすく、莢伸長期以降に降雨が多いと多発する。発生防止のため、開花後15～50日の間に1～3回防除を行う。ベンゾイミダゾール系薬剤（トップジンM剤、ベンレート剤）耐性菌が一部で確認されているので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。</p>

(作成 農林水産研究所)